

ぐんま国際アカデミー
イマージョンシンポジウムレポート

基調講演 2b

中嶋嶺雄博士 : 国際教養大学理事長・学長

「英語の使える日本人の育成とその課題」



ぐんま国際アカデミー

〒373-0033 群馬県太田市西本町69-1
TEL : 0276-33-7711 FAX : 0276-33-7710

基調講演 2b

中嶋嶺雄博士：国際教養大学理事長・学長

「英語の使える日本人の育成とその課題」

(司会)

中嶋先生は東京のほうからお着きになりましたけれども、ちょっと前まではロンドンにいらっしやいました。本日はGKAまでいらしていただきました。ありがとうございます。私のほうから簡単に先生のプロフィールを紹介させていただきます。

中嶋嶺雄先生は長野県松本市ご出身、そして東京外国語大学、東京大学において国際関係論、社会学の博士号を修得されました。その後、母校を含め海外の大学や大学院で教鞭をとられていらっしやいます。

著書につきましては、「現代中国論」、サントリー学芸賞受賞の「北京烈烈」、「21世紀の大学」などの著書をはじめ、共著、編著、訳書等多数おありです。近年では教育再生会議有識者委員、それから文部科学省中央教育審議会委員となられるなど、教育の分野でもご活躍されていらっしやいます。現在は2004年、日本初の公立大学法人として秋田県に設立されました国際教養大学の理事長・学長でいらっしやいます。

本日は先生のとてもお忙しいスケジュールの中ご都合つけていただき、こちらのラインにありますけれども、「英語の使える日本人の育成とその課題」という演題で貴重なお話を伺えることになりました。

それでは、中嶋先生、よろしくお願ひします。

「英語の使える日本人の育成とその課題」

中嶋嶺雄

おはようございます。大変お待たせいたしました。

たまたまスケジュールがタイトになってしまひまして、ロンドン、東京、群馬だったらよかつたんですけども、帰国後にすぐ秋田まで行きまして、雪でまた飛行機がとまって、きょうはお待たせしてしまつたわけでございます。ロンドンの前はグラスゴーまで行きまして、新しい協定を締結して、その近くのスターリング大学のキャンパスがスコットランドの丘そのものという感じ、それから今度はエクセターに飛びまして、エクセター大学との交流協定を結んだりもしてまいりました。きょうのテーマは、英語が使える日本人の育成に関することなんですけど、実はロンドンに行く前もたまたま教育再生会議で、この年末から新年にかけての第3次報告に英語教育をどういうふうにかき込むかという議論があり、私がおその責任者の一人なんですけど、かなり真剣に論じました。ご案内のように、中央教育審議会は、私この1月まで外国語専門部会の主査を務めさせていただいたんですけど、学習指導要領の改定によって、小学校の5、6年に英語教育を導入するということまではようやくこぎ着けたんですね。しかし、私自身は従来からの観点からすると、これは非常に

不十分で曖昧で、我々の考えている「英語が使える日本人の育成」にはこれでは満足できないというふうに、私は思っておりますし、教育再生会議の中でもかなり強いそういう意見もありまして、中教審の報告をさらに進めた形の報告を第3次報告に書き込もうと私たちは思っております。

それは、一つには、今の小学校の英語教育についてですが、もう群馬はここでいろいろ実験的にイメージ教育を通じておやりになっていると思います。私自身もいろいろ学ばさせていただかなければいけないと思うんですが、まず、本来は小学校ではなくて幼児教育からこの問題をきちんとすべきではないかと思うんですね。しかし、小学校でも1、2年と3、4年と5、6年、身体的、あるいは精神的な発達段階では随分違ってきておりまして、この間も東京のある会議で講演をさせていただいたときに、現に小学校で英語教育を担当している教員の方々が強く私に訴えられたことは、5、6年から始めるというのはぜひやめてほしい。5、6年というのは言ってみれば思春期というか、精神発達期になっているし、ほかに関心が移る時期ですから、なかなかそこから英語で話さないとか言っても、生徒のほうになかなかついてこない。やるなら1、2年生からと言われました。私自身は early education に関心があり、私自身がヴァイオリンで有名な鈴木鎮一先生の才能教育研究会、全世界に今や広がっているスズキ・メソッドの第1期生ですから、その立場としても、できるだけ早くやったほうがいいんですね。特にイメージ教育というのはそうだと思います。

それで、そういうことからすると、少なくとも今の文科省の学習指導要領では、いろいろ制約もあります。まず授業時間の問題もありますし、ゆとり教育が惨憺たる結果を招いたことによって最近の基礎のテストその他でも非常に日本の知的達成度が問題になっていますから、そうするとやっぱり1、2年生は少なくとも今のカテゴリーでは特別な教育の形ですね。それから、3、4年生は総合的学習の時間が残っていますからそれにして、5、6年生は教科として導入すべきではないか。今回の中教審は教科の一つではないんですね。教材、教科書もない。やっぱりそこはきちんとしたほうがいいのではないかというのが私の考え方でありまして、それが実現するまでには、ひょっとして、もし我々の教育再生会議の報告がそのまま生きたとしても、また何年かかかるわけですよ。そういうことをしている間に、日本の英語教育は近隣のアジア諸国に比べても大変遅れてしまうと思います。

そもそも私が座長で英語教育の懇談会の答申を最初に文科省に出したのは、もう7、8年前なんです。それは、「英語教育指導方法の改善に関する懇談会」でした。中曽根さんのご息の中曽根弘文文部大臣のときに発足しまして、私はその答申を、ここにコピーがありますけども、今の官房長官の町村さんに渡しているんですね。それは、平成13年1月ですから、それから数えてもう数年が経ってしまっていて、これからまたようやくということになりますと、少なくとも10年以上アジア諸国に比べても遅れをとってしまいますよね。ますます英語が必要な、これは文句なしに必要なんですね。その英語が使える日本人がいかに国際的に少ないか。きょう午後のセッションで私どもの大学について少しPRをかね

て、大学の理念なり設立の趣旨を話させていただきたいと思いますが、そういう立場からしても、この答申が出てからもうそんなに経っている。2001年の1月ですから、もうまもなく出てから7年間も経っているということです。

この答申は、「英語を学ぶから英語で学ぶ授業へ」として答申を出しています。英語指導方法改善法を大学等の英語教育で提言。そして、このときにも新聞記事がここにありますけども、英語を小学校の教科というふうにきちんと提言しているんです。にもかかわらず、それがようやく今回学習指導要領が改定されるということで、実に遅々たる動きですよ。

それにはいろいろな原因があると思うんです。確かに英語教育に関する非常に大きな誤解が、皆さんはそうじゃないかと思いますが、特に日本の英語学習の中にあります。それから、文法を重視せよという神話みたいなものがあって、あるいは知識人の中にもあるようですね。そして、コミュニケーションを重視したオーラルなイマージョン教育に対する非常にある種のアレルギーがあります。そして、ですから、小学校への英語教育の導入に反対する人は、文法重視の英語学者にも多いんですよ。SVとかCとかSVOとか文法とかばかりです。私自身の語学体験をむしろ話したほうがいいのかもかもしれません。

私はほとんど英文法っていうのは知らないんです。というのは、英語を習ったのは高校1年までで、2年からは、当時さっきの紹介いただいた長野県の松本深志高校というところなんですけども、昨年創立130年記念の式典をやったという古い、長野県で一番古い高等学校なんですけど、そこに正課としてドイツ語とフランス語がありました。ですから、私は2年からフランス語をとって、そして当時フランス文学やシャンソンなんか非常に興味を示していきました。それで大学受験はフランス語でやりましたから、フランス語は非常に得意だったんですよ。だから、英語の仮定法とか何とか知らないのに、毎日英語を話していて、でもちゃんと通じますし、それでいいんだろうと思います。

今回もずっとイギリスに1週間ぐらい滞在して、毎日のように英語の世界でいろいろとやってきましたけども、要するに、スコットランドではなかなかキャッチできず困りましたけど、まあ普通に通じるし、大学での授業も英語で持っていますし、外国の大学でも客員教授としてUC（カリフォルニア大学）サンディエゴ校の大学院で1年間教えたり、そういう経験もいろいろありますが、それでいいんだろうと思いますね。

： だけど、ぼくはややもすれば学者であり、いわゆる知識人だからという議論がすぐあると思うんですけども、このときの懇談会もなかなかそういう意見がなくなりませんでした、当初は。一方英語やると国語がだめになる、あるいはただでさえ今国語力が、書く能力がない、漢字も知らない。そこに英語とは何事かという俗事に入りやすい議論があるわけですね。前文部科学大臣の伊吹さんなんか、私も個人的にはよく知っているんですけども、文科大臣に就任して間もなく、「国語が大事なんで、英語は小学校に入れるべきではない」なんていうことを、すぐ自分の意見を言ってしまった。それがパッと出て文科省でも半年以上全く審議がストップするという状況がありました。今回町村さんはその点ちょっと違いますね。彼自身も英語の世界に若干かいくぐっていますし。だから官房長官、それから

今の文部科学大臣もかなり英語に詳しいものですからちょっと違うんですけども、いずれにしてもそういう状況がある。そういう中に、2つの座標軸を設けたんですね。つまり、国際的な舞台で活躍するような、そういう高度な英語能力を持つ人材と、しかし一方では一般の国民、普通の小学生、中学生、あるいは高校生、大学生も含めて、それらの初等教育段階における、あるいはほかの国民の英語力をどうするかという、この2つの問題があるというふうに区別をしまして、それぞれの座標軸で議論した上で、最終的にやっぱり英語教育を根本的に改善しなければならない。従来の英語教育ではだめだということでコンセンサスを得たんですね。それは言うまでもなく、例えばコンピューター一つをとって、そこはもう間違いなく英語が使えるか使えないかでは世界の広がりや違っちゃいます。そして、日本人全体で非常にその英語力が弱いわけですから、あるいはこれから未来を背負っていく子供たちが常に、自分は英語ができないという、そういうコンプレックスの中に彼らを落とし込むだけどいいのかという問題ありますよね。中国にしても台湾、韓国、近隣諸国だってすごく今や英語がうまくなっていますよね。

それから、日本のマスメディアは、台湾に対する偏見というか、今回台湾は数学的思考力で1位になったのに、朝日新聞なんか見ると、台湾の「た」の字も出てこない。台湾は採り上げるといけないと思って韓国を採り上げておりますけども、数学的思考力が1位になって、これなんか大変なことですよ。それで、そういう状況がありますのは、やっぱり英語力全体を改善する。それには従来の英語教育を根本的にもう打ち破らなければいけないというのが私の教訓なんですね。ですから、そういう意味でそれはやっぱり高等教育まで通じます。第一日本の高等教育は、この間こちらのほうにもいろいろ問題が提起されているわけですが、本当に欧米と比べてもアジアの近隣諸国、それからシンガポールとか、それから台湾、それから韓国、最近では中国も、全体はそうではないけれども、そういうところと比べても日本の大学教育だめですね、こんなことでは本当に。10年間英語を学んでしょう。今大学ではほとんど定員割れしましたから、大学全入時代。10年間学んでいるのにそれを使えないわけですよ。仕事で使えるまでにはTOEFLで600点必要だと思えます、ペーパーベースでのテストでね。そうすると、日本で600点TOEFLとれる大学生は、卒業生は0.01%しかいないんですよ。毎年50~60万、そのうち留年したり留学する人もいるとしても、約1,000人前後です。全員TOEFL受けるわけではないにしても比率からしても0.01%しか英語で日本、仕事ができるような人材を育てずに大学を卒業させているわけです。こんな安易なことをやっていちゃいけないですよ。そこで、大学における英語教育も日本的に回復が成り立たない。

したがって、英語教育の改善というものはまさに「教育は国家100年の計」と言われますけども、本当に重要な大きな課題になってまいります。そして、こういう重要な課題で突破口切り開いていくときには必ずいろいろな抵抗がありますもので、その抵抗はもちろん逆風として追い風に変えていくような信念と努力が必要だと思えますね。

幸いにして文科省も教育中教審も少しはそちらの方向に動きつつあるわけで、このぐん

ま国際アカデミーとか国際教養大学とか、そういう非常にアドバンスとかパイオニア的なところは大いに提携して頑張っていかなければいけないんじゃないかと思います。

さて、そこでさっきの国語と英語という問題についてちょっと触れてみたいのですが、いろいろ実験校として既にあっちこちでぐんま国際アカデミー以外にも特区なんかでやっているところもありますし、京都とかあちこち品川区とか成田市とかあっちこちにも先端的にやっているところありますよね。そういう杉並なんかもそうだと思うんですけど、実験結果からして英語をきちっとやると、ここがだめになるっていうことはほとんどあり得ないことなんです。だから、英語だけやっていたら国語ができない、逆に国語ができなければ英語はできない。その相関性も高い。そのことを最近EUの言語政策で非常に注目されていて、ちょっとご紹介してみましよう。

例えば、EUはご案内のように、イギリスのように英語がもう母語であるところもあるわけですが、ご案内のように非常に言語的にはマルチリンガル、文化的にマルチカルチャーですね。その多言語、多文化主義というものの上に乗ってEUとしてどういうふうの問題を考えていくべきかという議論が非常に進んでいます。その一つに、皆さんもすでにご承知かもしれませんが、1995年に教育と学びに関する白書が出ています。その白書の中に、EU閣僚理事会では、学校で少なくとも2言語に堪能になることが必要であるという理事会の決意を行っていますよね。その中で、さらにこういうことが言われていますね。言語を学ぶことで他の重要な効果がある。言語を学ぶということは非常に重要である。経験上、大変早い時期から英語教育が始められると、学校の成績が向上するための重要な要因となる。他の言語に接すると、母語が堪能になるのみならず、他の言語に接することによって母語の構造もより堪能になる。母語が非常に堪能になるのみならず、言語教育が母語の習得をも容易にする。言語教育が心を広げ、知性を刺激し、人々の持つ文化的視野をも広げる。多言語主義はヨーロッパのアイデンティティ、共同社会、そして学習社会には欠かせないものであるという言語上方針を出しているんですね。これがもう既に90年代のEUの政策です。そして最近はさらに進んで、multilingualismからplurilingualというところにきているんですね。plurilingualという言葉をちょっと書いてみます。

プラソサエティというようなことです。plurilingualというのは、日本語に訳すと複言語主義と言ったらいいんでしょうかね。それはどういう理論かというところちょっとご紹介しますと、多言語はおわかりになると思うんです。まさにヨーロッパはいながらにして多言語共存の世界です。それに対してplurilingualというのは一つの言語を覚えていると、それが自然に自分のcommunicationとかdiscourseの中に入ってきていて、そして自分の言語世界は非常に複数的というか、非常に複雑というか、拡大されるというのですが、お互いに作用があるというのです。確かに私も自分で考えてみると、やっぱりさっきこちらの人が中国語であいさつをするという、大変中国語も上手なんですけども、少なくとも中国語と英語は堪能であるわけですね。そうすると母国語含めて3つ。私も下手なんですけども、例えばフランスに行けば空港に着いたときからもう、昔習ったんだからと思って

フランス語で空港離れるまで通すんですよ。そうすると相手はぼくの邪魔する。わざと英語でしゃべりかけても、フランス語で通す。やっぱり1週間ぐらいいると少しブラッシュアップされるような気もしますわね。そういうものが混ざっているわけです、私自身の。そうすると、そのことによって言語的世界、自分の言語的世界といろいろ刺激しあっているはずですよ。少なくとも今の子供なんかは、いわば日本語以外に英語をきちんとやっていないにしても、例えばコンピュータにアクセスするのにいっぱい英語の単語が出てくるわけですから、自然にその子供は複言語主義になってきているという、そういう議論ですよ。つまり、他の言語に接したり採り入れる、そういう言語体験を通じて、個人個人のコミュニケーション能力が非常に拡大して、言語体験のそうした空間というものがある経験や知識、覚えた単語も含めて、それとともに共鳴しあって、いわば理想的な言語空間ができているというのが plurilingualism であります。

なお、これは外国語教育のヨーロッパの共通の枠組みとして非常に参考になるわけですね。国際教養大学でもすべての授業を英語でやっているんですけども、3言語主義ということをお前は主張してまして、母語と英語ともう一つやりなさい。その場合に、いわばセカンドランゲージ、ライフワークとしては中国語、それから韓国語、それからロシア語、今年からモンゴル語、つまり東アジア、East Asian Studies になりますから、モンゴルを非常に重要な東アジアの一員として位置づけていますからね。これチャイニーズの世界と違いますよ、モンゴルは。だけどロケーションとしてはまぎれもなく1アジアですので、それに極東ロシアを入れて、東アジアの定義を私自身がして、大学のカリキュラムに反映させているわけですけども、そういうことから考えますと、ここはもうチャイニーズの世界ではありません。チベットもそうですし、とにかく儒教が入っていないですからね。日本は足利学校みたいに非常に儒学の、国学的にも儒学の影響が強いから、あんなにグレートチャイニーズ、チャイニーズはいっぱいある。すぐ近くにいながら、儒教を拒否していますから、チベットもモンゴルも。ですから、彼らは箸を持つ文化ではないですよ。カルチャーがチョップスティックじゃなくて、箸を使わないようなものなんですよ。

だから、そういう空間が、飛行機では2、3時間飛ぶと東アジアになりますし、ヨーロッパから見ると日本人も韓国人も、中国人も皆同じような顔しているのを見ただけけれども、この東アジアでは非常にカルチャーの違いというものをいかに認識しているかということが大事であって、そのことをやっぱり大いに強調したいと思うのですけども。何かというところすぐ東アジアとか共同体とかいう議論があるけど、私はそれは間違っていると思います。むしろ日本のよさということをお前につかんでいく。そのためにこそ逆に英語をきちっと国際的なグローバルなコミュニケーションのツールである、サインであるものをきちんと抑えておかなければいけない、きちんと習得していかなければ、いわばグローバル世界から落ちこぼれてしまうというふうになりますね。

さて、きょうのお話の論点が、そこについていました。つまり、日本の教育界なり文科省なり再生会議における議論を紹介し、そして私自身のヨーロッパにおける最近の理論や

なんかを紹介して。

もう一つの論点はやっぱり early education について触れてみたいと思います。実は私バイオリンを習いました。松本ですから皆さんもご承知かと思いますが、群馬には豊田耕兒さんという群馬交響楽団の指揮もしたことがありますけども、鈴木鎮一さんという大変なバイオリンの先生がいて、彼は「どの子も育つ、育て方一つ」という、「人は環境の子なり」という、そういうスローガンでも知られております。だけど同時に鈴木先生は、なぜその才能教育ということに気がついたか。Talent education ですよ。しかも early education としての talent education。ところが鈴木先生は、あるとき日本人の子供が皆日本語をしゃべる。あるいは日本人は皆日本語をしゃべる。日本語というのはすごく難しい言語のはずなのにどうして日本語がしゃべれるのかというところから彼は気がついたんですね。

それまでは鈴木さんはもともと名古屋の鈴木バイオリンの御曹司、日本で明治になってから鈴木政吉さんという人が、初めてバイオリンの工場生産に成功したんですよ。それで鈴木バイオリンという会社をつくったんだけど、鈴木先生自身は、ですから将来はそこを継ぐということで、名古屋商業しか出ていないんですよ。芸大とか今で言う桐朋とかそういう音楽世界のアカデミズムではないんですね。だからそこにもいろいろ問題があるんですけどもね。まさに民間人なんです。それで、18歳のときに当時のエルマントーンと言われたエルマンのバイオリンでアベマリアを聴いて、本当に素晴らしいと思うんですね。自分がそういう世界にいたけども、自分は音楽を弾いていませんでした。それで、たまたま尾張の徳川家の支援を得て、ドイツへ留学します。そして、ベルリンでカール・クリングラーの演奏会、そしてそこで最初に聞いたのが偶然モーツアルトのフルート五重奏曲だったんですね。これで本当に感激して彼はカール・クリングラーの家に訪ねて行った。それからバイオリンを始めるんですよ。それで、当時アインシュタインもバイオリン弾きますけど、アインシュタインなんかと親しくなって、そしてドイツから帰ってきて日本で初めて兄弟で鈴木カルテットというのを始めた。つまり、日本のクラシックミュージックの草分けなんですね。

それでいながら、あるとき子供を連れてきたお父さんが来て、それが江藤俊哉のお父さんでした。江藤俊哉さんを育てた。そしてその後今度は豊田耕兒さんが2歳のときにまたお父さんに連れられてきて、そして彼は4歳で“ユーモレスク”を弾いて、天才児として大変注目を浴びる。そして、そのほか諏訪根自子とか何人かの人たちを育てたんですよ。だけどそれは皆音楽家を育てるためであって、鈴木先生がその後考えたように、どの子も育つじゃなくて、まさに日本のバイオリニストはほとんど鈴木先生が育てた。その鈴木先生が疎開で木曾に行ったときに、松本の文化人たちが鈴木先生を松本に呼んで、松本音学院というのをつくったんですよ。こんなぐんま国際アカデミーみたいな立派なのじゃなくて、当時の下横田町というところに行けばそこはちょっと花街に近くて、検番って皆さんわからないでしょう。芸者さんたちがその共同組合みたいなところがあって、その木造の

二階建てを借りて、松本音学院というのをつくりました。昭和21年の秋です。終戦が昭和20年ですから、1946年。そしてぼくはそのとき小学校3年生で終戦を迎えましたので、4年生なんですね。そして翌47年1月ごろ、母に連れられて雪のころに、松本で音学院に行ったことを、今でも覚えていますよ。そうしたら鈴木先生が“タカタカタッ”ってやったんですね。それが鈴木教室入門の自分の経験なんですけども、ぼくが入ったときは終戦直後ですから、その当時まだバイオリンなんて持っているだけでも一番になれたんですよ。ましてや信州の田舎です、松本は田舎ではないのかもしれませんが、だけど、それ自体に楽譜もないし、うちの母なんか徹夜で楽譜を写して一緒にやってくれたんですが、もう10歳でしたらからね、スタートが10歳では遅いんですよ。そのころ鈴木先生の教室は4歳ぐらいから皆始めまして、それで約10人の第1期生のうち9人が音楽の道に進みましてプロになりました。それで、オーケストラのメンバーになったり、海外で活躍している人もいます。だけど、私自身はそんなにバイオリンはよくできなかったですね。もし4歳から5歳にやっていたらぼくもそっちにいったかもしれないですけど、何しろ10人鈴木先生の指導を受けたわけですからね。だからそこはまあ自分としてはよかったなと思うし、子供のころから豊田耕児さんみたいなすばらしい人が小林健次さんと一緒にバッハのドッペル・コンチェルトを松本音学院の寒いだるまストーブ囲んで弾くわけですよ。それ聞いているともうすばらしくて、とても自分は音楽の道なんかはいかれないと思って、初めからそんなんじゃないのがかえってよかったのかもしれませんね。だから、才能教育はどの子も育つんです。ただ、その育った子の中から本当に芸術家として巣立っていくというのは違います。

今国際教養大学は教養を重視しますから、本物の第一線の先生を招いているんですけど、音楽は渡辺玲子さん、彼女は当時15歳でやっぱりスズキ・メソードの出身なんですけど、音楽コンクールで優勝して、ジュリアードで随分活躍して、ニューヨーク、東京でしょっちゅうサントリーホールとかそういうところで演奏活動をしています。彼女はバイオリンを弾きながら芸術論の音楽と演奏という授業を持っています。本当に少人数の10人ぐらいで教えながらやっていて、ぼくは夕暮れ時なんかは、これが本当の教養教育かなと自分でも大変うれしく思うんですけども、ビバルディの春、急に嵐が出てくるんですよ。どうしてここでビバルディは春嵐を入れたのかなとか楽譜を見ながら、弾きながら教えるというのを先生やっていますので、渡辺さんみたいになる人はやっぱり1,000人に1人ぐらいですよ。豊田耕児さんみたいな人は1,000人に1人、山田晃子さんみたいに国際コンクールにも優勝した人もいますけれども、にもかかわらずやっぱりバイオリンがよく弾けるという人の中でも1,000人に1人ぐらい。そして一方では、せっかくバイオリンをやったのにバイオリンをもう弾かなくなっちゃった。ピアノにしてもそうですよね。そこにまた一つの問題があって、いかに持続するかということが、英語教育もそうだと思います。やるときはやっても、使わなければ頭脳が錆びついちゃいますからね。そういう意味でもきちんとした指導で早く教育をすることが大事なんですけども、さっき言ったタレントのこ

となんです。それともう一つはやっぱりその中の本当に演奏家として活躍するというのは本当に大変です。芸術の世界は私も見ていますけども、もう本当に大変で、次から次へ演奏家がどんどん出てきますよね。その中でポジションを維持していくというのは大変なんですけど、それはやっぱりそんなに偉大な人生をといわれると思うんですけども、それは彼がやっているわけではなくて要するに天分なんです。だから、天分とタレントとは違うんですね。Gift というのかと言ってもいいのかもしれませんが。だから、天分がやっぱりパールマンの演奏なんか聴いたりしていると、本当に難しい曲をうんと気軽に弾いちゃっている。すごい天分持っていますね、音楽家としての。ぼくはそう思います。

「そうすると、やっぱりそこで自分というものをいかに自己判断するか。才能教育のお母さん、自分の子供たちも音楽スターになれるんじゃないかと思っただめなんです。そういう教育もきちんとしていかなければならないんですけども、いずれにしても鈴木先生が始めた幼児教育のあれがですね、最近はやさしいことにブレインサイエンスが非常に発達して、脳科学によっても実証されていますからね。

「この間もドイツでたまたま私と豊田耕児さんの会長と私は常務理事、現在は名誉理事で顧問みたいなことしておりますが、一緒に鈴木チルドレンも10人連れて、ベルリンで演奏会を開きました。今スズキ・メソッドというのは世界に約40万人やっていますね。日本ではいろいろ批判もあって、さっきの音楽家みたいな。ですけど本当にアメリカなんかでもオーストラリアなんかでも、最近ヨーロッパでも盛んです。そのスズキ・メソッドはやっぱり early education なんです。メソッドというからには何か方法がなければ。ウィーンのシェーンブルン宮殿の広場でウィーンの市政1000年のときに子供たちと一緒に弾いたことがありますけども、そのときにスズキ・メソッドというのは何かという質問があるんです。“What is the Suzuki Method?” そのときに私が、スズキ・メソッドの学術会議の研究会の座長もしていましたからいろいろ考えて、やっぱりメソッドというからには方法である。その方法は、暗記と繰り返しなんです。スズキ・メソッドは楽譜使わないですよ。ちょうど英語教育でも初めから文法だとかもちろん質問なんていうことやったら、皆英語嫌いになっちゃうんです。スズキ・メソッドは楽譜から入るのを耳から聴いて、しかもリズム感をきちんとつける。“キラキラ星変奏曲”というのは鈴木先生がつくったんです。もともとはご承知のようにフランスの民謡ですよ。“タッタッタッタッタ”でしょう。それを鈴木先生は“タカタカタ”ってやったんです。これはものすごい、簡単なことでなくともものすごい大きな発見だと思うんです。“タッタッタッタ”だとうなっているから、“タカタカタ”っていうリズム感ときちんと、ただただ小節ごとにきちんと区切って全体を構成するっていうのは子供のうちから教えちゃうわけ。英語と私は非常に共通性があると思うんです。ある程度のところまでいくときはやっぱり暗記だと思います。イメージ教育というものもそうだと思うんです。私の誤解があるかもしれませんが。それに共通している。それから繰り返し。

鈴木さんが私に言った言葉の中にも、ほかの人は何か覚えていないかもしれないです

ども、私は一番心に残っているのは、「バイオリンは1日弾かないと2日後退する」って言ったんです。だから、1週間弾かなければすごく後退しちゃうわけでしょう。やるとき一生懸命やっても後弾かない。だから毎日少しでもいいからレッスンをしなさい、10分でもいいからやりなさいと。それはだから一つの繰り返しなんですね。暗記と繰り返し。これがスズキ・メソッドのメソッドたるゆえんだと思います。それから、できるだけ早い時期にいい環境を、いい先生について、それから親にも一生懸命協力してもらって、そしてときどき皆のコンサートをする、合奏する。武道館で3,000人の演奏をやっていますので知っていらっしゃる。何か集団主義じゃないかという批判の中で、そうではなくて、まずやっぱり型を覚えるんですね。型を覚えて初めて次のクリエイティブな自由な合奏の喜びがある。始めから自由にやる人は合奏なんかできないですね。

よく戦後の日本の教育は全部平等主義で、子供の自発性に任せて自由に描きなさい。だけどピカソだってマチスだって、あんなピカソみたいな抽象画を描く人がデッサンすごいですよ。やっぱりデッサンをきちんとやるっていうことも、そういう教育がなくなっているところの議論であると思います。そういう意味では幼児教育が非常に大事なのと、独自に幼児教育の一つのあれは、どの子も育つということで、落ちこぼれをつくらないことですね。ここがまた一つのポイントではないかと思えます。

アメリカでは今のブッシュの前のシニアのブッシュのときだったかな、落ちこぼれをつくらない教育を法律化しましたよね。ですから、“No child left behind”ですよ。こういう法律をつくってやっぱり全体のレベルを上げるという、その意図は非常に私は正しかったと思います。ですから、幼児教育から見ると、「つ」のつくうちならいいんですけどね。2つ、3つはちょっと抜きにして4つぐらいから始めて、9つまで、10になるとだめです。小学校4年生は10でしたからね。だから、そのぐらいからはじめると非常に自然に音楽が身についてくる。そして、始めたものを持続させるということは必要ですね。

子供は英語なんかでもすぐ覚えるじゃないですか。外国語にちょっと字も添えてやります。オーストラリアでは家族、子供が4人、1年間小学校で学んだ。それで、非常にスペシャルティーチャーがまいて、ミセス・ロス、子供もなついたら、全く英語ができなかったんですよ。急に私はキャンベラのオーストラリア国立大学の客員教授になって行ったんです。そして家族も行くということで行ったんですけど、それが1年間、一番下の子なんか小学校6年生から1年生まで、年齢も若いほうがキャッチアップが早いですね。ですから、1年間で英語でけんかするようにもなります。だけど、それで大体日本に帰ってくると忘れちゃうんですよ。その期間をどうするかっていうことはやっぱり先生なり親の工夫が必要じゃないかと思うんですけど。

この前もたまたま私は外大のニュージーランドの留学生でしたが、家庭教師をつけてもらった。それから、オーストラリアでは子供たちの *verse speaking* がありますね。詩を朗読する。これはとってもよかったです。その朗読した詩を繰り返すだけでも違いますね。長い詩を暗記で朗読させる。日本では小学校であまりそういうことはやらないでしょう。

朗読することを通じて、英語を聞くという、そういうようなこともやりました。あとはたまたまアメリカに留学したんですけども、そうすると帰ってきて今度は大学受験の問題もありという歳になりますよね。ですから、そういう形で英語をせっかく学んだものいかに持続させるか。その点ではぐんま国際アカデミーは小学校から中学、高校まで一貫しているんですね。それが大事です。いかに一貫したことをやるかということが大事です。我々が「英語指導方法改善の懇談会」で提言したものというのは、一貫した指導方法と一貫した教育現場、これが非常に大事だというふうに思いますよね。ぜひ皆さんでいろいろご検討願いたいと思います。ちょうど、あと若干質問が残るかもしれません。

どうもご清聴ありがとうございました。

(司会)

中嶋先生、どうもありがとうございました。

ご質問少しお受けしてもよろしいでしょうか。では、ご質問ある方。挙手いただけますか。

(質問)

伊勢崎市で英語の非常勤を小学校でしております根岸と申します。きょうはありがとうございます。

先生、逆風を追い風というお話だったんですが、現場の教師がじゃあ一体今どうしたらいいかというところで何かご示唆することがございましたら教えてください。よろしくお願いします。

(中嶋)

私現場のことをつまびらかにお聞きしているわけではないのですけれども、やっぱり根本的には英語教育がいかに小学校に必要なかという、そういうある種ミッションを自分としてきちんと持っていることだと思いますね。それがないとぐらぐらしちゃいますし、それから同時に、自分は大変磨き上げられているという意識をぜひ持っていただきたいと思います。この2つがあれば大体のことは耐えられながらいくんじゃないでしょうか。

(質問)

イメージ教育は英語教育に非常に有効だということはこの二日間出していただいてよくわかったんですけども、翻って35時間ずつ全部の学校で数年後から始まるという、実には中途半端な形で折り合いがつきそうな雰囲気ですけども、中途半端だとしてもそれが数年間、7年か8年か10年になるかわかりませんがとも続いていくことを考えたときに、中途半端な形の中で英語が使える日本人を育成するために何をイメージから学べばいいのか、何を考えながらその中途半端な中で、私ども教えるのは来年から特区で

英語始めるんですけども、何を目標していけばいいのか、その中途半端な中でということについてご示唆がありましたらお願いします。

(中嶋)

今回の中教審の答申どおりにいくとすれば、ご指摘のように非常に中途半端ですよ。却って問題のほうが大きくなるかもしれない。それから、先生方がいろいろ苦勞される間にやって効果があるかどうか。そういう意味では、私は強く提言しているのは、中途半端なことをやめるように私が努力したいと思います。そして、それを改善する一つは、特区をできるだけ増やして、特区で成果を上げる。それから、もう一つは、公立小中学校だけではなくて、私立もたくさんあるわけですから、そういう私立なり特区なりのところで成果を上げるということが必要になりますね。それによってかなりいろいろ突破口が開かれるでしょう。

それから、今のように、私は少なくとも週3時間はほしい。今の指導要領ですと年間30時間とか、そんなものが多いわけでしょう。これだったらほとんどちょっとお遊びをやっているぐらいで、本当のその英語の堪能な日本人を育てるということになりませんよ。ですから、その意味ではもうちょっときちんとした教育をそれぞれの特区が、あるいは私学なりがしていただくのが一番いいんじゃないかと思いますね。

2万数千の小学校がありますから、それを一律に全部やるというわけにはいかないかもしれませんね。なかなかだからそういう意味でも中教審の方針にはかなり問題がある。そこを突破するように、我々少なくとも教育再生会議はかなり強い提案をしたい。それにかなり中教審なり文科省が影響されるんじゃないかと思いますね。

今の中学も実際には週に3時間までいかないで、実際にいろいろ学科数とかそういうことになると週に2.5ぐらいですよ。これ今度増えるようになりました。それから、ポキヤブラリの数も基本単語も逆行ですね。全くだから時代に逆行していますから、そこもきちんとしていかなければならない。

(質問)

先生、先ほど早く始めてきちんとした指導をしなければいけないというふうなことをおっしゃられたわけですが、その際にポイントはもう教員にかかっていると言われてたりしております。だからこのGKAでも、いい先生がおられるからうまくいっているというふうに私は思うわけですが、中教審でどんな形で教員養成についての議論がなされたのか。

(中嶋)

中教審というのはあまり突っ込みのところまで踏み込めなかったんですね。まだこれからです。我々の大学は来年からグローバル・コミュニケーション実践研究科という専門職大学院を立ち上げますけども、そこは数が少ない少数制ですから少ないんですけど、まさ

にいい英語の先生をいかに養成するか。今一番問題は、学生数とか、それから教職の免状のあり方自体もまだ中途半端なんですよ。それで専門職教職大学院2年なわけですね。だけど、これはスクールリーダーを養成するところであって、肝心の英語をどうするかというようなところはやっていないんです。特に各都道府県なりいろいろな実験的な試みが必要じゃないでしょうか。秋田はかなりそういう点で一生懸命やろうとしていますよね。この間の全国学力テストでは秋田が一番になったでしょう。これは偶然じゃないですよ。もし時間があれば午後のセッションでも話したいと思います。やっぱりいい先生をいかに確保するか。そしてそのいい先生というのは必ずしも小学校の場合、今講師とおっしゃったけど、いわゆる教員職免許を持っていなくてもいろいろな形でその道を開く特別講師とか、うんと増やしていかなければならない。地域ですね。地域に英語ができる人材がいますよね。そういう人たちをすごく活用する必要がある。それから、ジェットプログラムなんか少しなかなかな伸びが多くないんですけど、うんとそのように増やしていく方法を、我々声を大にしてやっていく必要があると思いますね。

(司会)

それでは時間になりましたので、こちらで閉めさせていただきます。この後昼食をとっていただきまして、12時20分から同じこちらの会場でフォローアップした中嶋嶺雄先生のグローバル化と国際教養大学の挑戦のほうに入らせていただきます。12時20分からこちらの会場です。

それでは中嶋先生、本日はどうもありがとうございました。

―― 終了 ――